

岐阜県農業技術センターニュース No.32

組織改編を行い新体制へ！

平成28年度より、環境部と生物機能研究部を組織改編し、土壌化学部と病理昆虫部を新設しました。

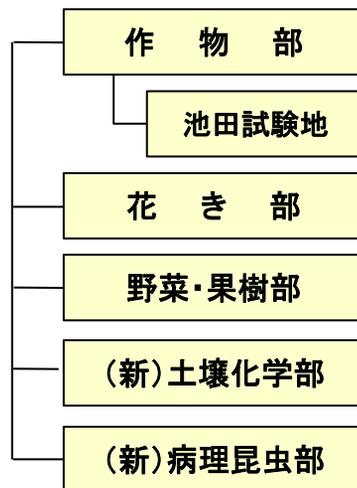
○(新)土壌化学部では、以下の研究開発を実施します。

- ・適正施肥・生理障害対策技術の開発
- ・農薬の安全使用に関する研究
- ・新品種育成や品種保護等、バイオテクノロジーを活用した研究開発

○(新)病理昆虫部では、以下の研究開発を実施します。

- ・安全・安心な農産物づくりのための病害虫防除に係る研究開発
- ・化学農薬に替わる天敵微生物を用いた生物農薬の開発研究
- ・遺伝子診断技術を用いた植物病害の感染原因の解明、防除技術開発

農家のニーズにきめ細かく応えられるよう、組織改編の利点を最大限に発揮していきたいと考えています。



イチゴ新品種「華かがり」を育成しました！

(野菜・果樹部)

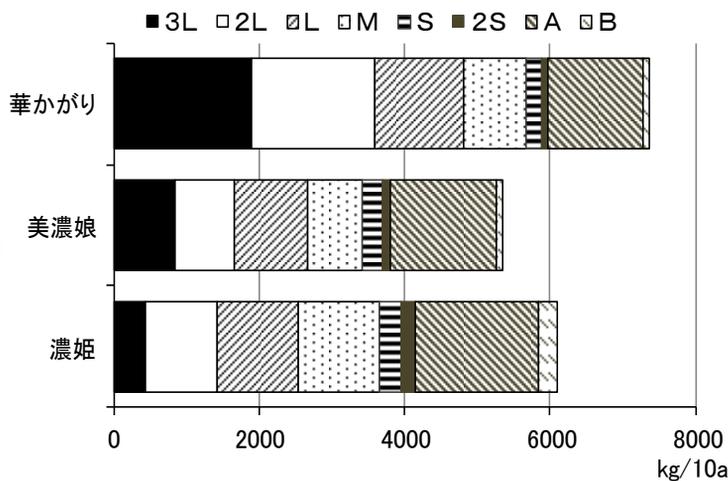
本県の冬春いちごは、岐阜県育成品種である「濃姫」が55%、「美濃娘」が26%を占めています。このたび、さらに岐阜いちごブランドの向上を図るために、新品種「華かがり」を育成しました。

「華かがり」は、県内イチゴの主力産地である岐阜地域のシンボル「金華山」の「華」と、赤くて大きな果実と清流長良川の鶺鴒の「かがり火」をかさねあわせ命名しました。本品種は、大果で秀品率が高い、空洞がほとんどなく、果汁が滴り落ちるほどジューシーという果実品質に加え、連続出蕾性があり多収であるという特徴を持ちます。

今後、試験栽培を進め、平成30年頃に本格出荷を目指します。



いちご新品種「華かがり」



規格別収量(数値は3ヶ年の平均)

水田土壤の可給態窒素を加味した施肥法の開発に 取り組んでいます。

(環境部)

コメの収量や品質には、肥料だけではなく土壌からの窒素の供給が大きく影響しています。このため、高品質なコメを安定的に生産するためには、水田土壤の可給態窒素（いわゆる地力）を考慮し、窒素の施肥を適正に行うことが重要です。

水田土壤の可給態窒素を知るためには、これまでは長期間の培養試験や煩雑な分析操作が必要でした。しかし、近年、短期間で簡易に評価できる手法が開発されました。

そこで、今年度から、この簡易評価法に基づいた「ハツシモ岐阜SL」の適正な施肥技術の開発に、中央農研を含めた共同研究で取り組んでいます。

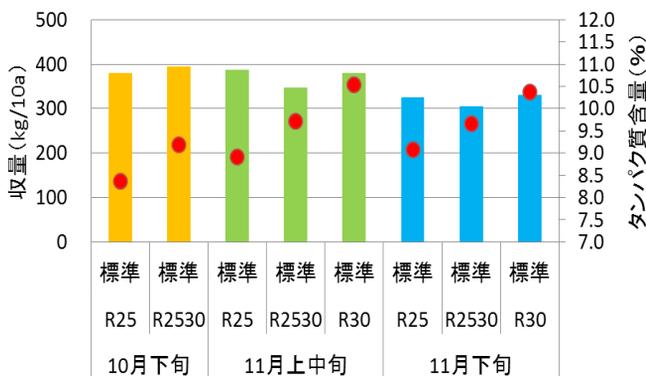


小麦新品種「さとのそら」の施肥技術の開発

(作物部)

岐阜県産小麦で約半分の作付面積を占める「農林61号」に縞萎縮病の発生が見られるようになり、その対策として抵抗性品種の「さとのそら」へ転換することとなりました。初期生育が早く、分けつが出やすい本品種は、生育後半に窒素溶出の多い被覆尿素肥料を基肥に使用し、追肥をしつかり行って有効茎を確保することでタンパク質含量が向上することが分かってきました。

平成29年産より本格導入される「さとのそら」が、新たな岐阜県小麦として実需者から評価されるよう、栽培マニュアルを整生産支援をするとともに、追肥時期、追肥量の基準となる指標作りに向けた試験に取り組んでいます。



基肥種類の検討（後効きの肥料でタンパク質含量増加）



追肥時期の検討
(追肥時期をずらして生育に対する影響を調査)

人事異動(平成28年4月1日付)

よろしくお願ひします。

転入者	新所属	旧所属	転出者	新所属	旧所属
長谷川雅也	所長	農政課	越川兼行	退職	所長
天野昭子	病理昆虫部長	病害虫防除所	鈴木尚司	退職	野菜果樹部農業班長
今西美江子	総務課主査	看護大学	米山誠一	中山間農業研究所	作物部長
吉田佳奈	総務課主事	県立岐阜商業高校	三輪俊貴	産業技術課	環境部専門研究員
坂井田彩野	花き部研究員	新規採用	山岸雅也	職員厚生課	総務課主任
			若山恵里那	農村振興課	総務課主事

岐阜県農業技術センター

〒501-1152 岐阜市又丸729-1

Tel 058(239)3131

<http://www.g-agri.rd.pref.gifu.lg.jp/>

池田試験地

〒503-2407 揖斐郡池田町般若畑631-11 Tel 0585(45)3837